

令和7年度  
すくわくプログラム活動報告書

(実施対象：1歳児クラス)

モニカ都立大園

M  nica

## テーマ

# 土粘土

### 設定理由

園庭遊びの際に、雨上がりにできた水たまりや泥に触れ、泥の感触や乾いた土が交わることで生まれる違いに気付き、握ったり押し付けたったりして形を変化させて楽しむ姿があった。また、日々の活動の中で寒天粘土を出した際に、集中してこねたりちぎったり伸ばしたりしていたことから、土粘土を使用して、その性質や面白さに関心を持ち、興味を広げてほしいと考え、テーマを設定した。

### 対象クラス

1歳児クラス・10名

### 活動のねらい

土粘土の可能性を知る

### 問い

「どう？」 「〇〇（特徴）だね」

### 活動期間

令和7年10月～令和8年1月

### 活動回数

計7回

## 活動①

### 机上で土粘土に触れる

#### 準備物

土粘土(5) | 荒木田土 | けと土 | 水 | 雑巾  
透明マット | スモッグ | マルチケース

#### 環境構成

落ち着いた空間で、子ども2~3人、保育者1~2人で行う。土粘土に触れ、押す、叩く、なぞるなど力を加えることで、様々な形に変化する様子を観察する。



## 活動②

### 土粘土の性質（ちぎる・こねる）を知る

#### 準備物

土粘土 | 雑巾 | 透明マット | スモッグ | マルチケース

#### 環境構成

落ち着いた空間で、子ども2~3人、保育者1~2人で行う。土粘土に触れ、押す、叩く、なぞるなど力を加えることで、様々な形に変化する様子を観察する。



### 活動③

## 様々な形の土粘土に触れ、土粘土に親しみを持つ

### 準備物

土粘土 | ホワイトシート | 雑巾 | スモッグ  
マルチケース

### 環境構成

自然光の入るホールで、子ども2~3人、保育者1~2人で行う。様々な形にあらかじめ成形されている土粘土に触れ、形を変えたりダイナミックな表現したりして土粘土に親しみを持つ。



### 活動④

## 土粘土の可能性を知る（乗る・踏みしめる）

### 準備物

土粘土 | ホワイトシート | マルチケース

### 環境構成

ホールで子ども2人、保育者1~2人で行う。縦25cm、横40cm、厚さ3cm程度の大きさの土粘土を用意し、踏んで感触を味わえるようにした。



## 活動⑤

### 土粘土を押して形の変化に興味を持つ

#### 準備物

土粘土 | 机 | 椅子2脚 | シートホワイト | スモッグ

#### 環境構成

ホールで子ども2人、保育者1～2名で行う。縦5cm、横10cm、厚さ4cm程度の粘度の塊を人数分用意し、指や手のひらで押す感覚を味わえるよう環境を整えた。



## 活動⑥

### 様々な形の土粘土に触れ、個々で物語を紡ぐ

#### 準備物

土粘土 | ホワイトシート | マルチケース

#### 環境構成

ホールに子ども1人、保育者1～2名で行う。様々な形にあらかじめ成形されている土粘土に触れ、土粘土を通して物語を紡いでいくことを楽しむ。



## 活動⑦

# OHPを使用して土粘土の可能性を知る

### 準備物

OHP | 土粘土 | 制作用マット | HDMIケーブル

### 環境構成

ホールに子ども1人、保育者1～2人。土粘土を長さ7cm程度に伸ばして横に置いておく。子ども自身がどのようにレイアウトするか決められるようにセッティングを行う。



この日初めて土粘土に触れた子どもたち。落ち着いた環境の中、土粘土の塊を前にそっと手を伸ばす姿が見られ、「ギュってする」、「手にくっついた」等感じたことをそれぞれの言葉や表情、仕草で表現していた。



「おててにくっついたね」



指でなぞると自然とできた跡



塊をリズムカルに叩き始め、「ぺちぺちってなってる」「太鼓だ」と太鼓に見立てる。叩くと音がすることに気付いた子どもたち。その手を話すと、手の形が跡になって残っていた。すると、ゆっくりと手形に自分の手を添わせて「一緒だ」と呟いていた。

保育者が「叩いた後の太鼓、どんな風に見える？」と問いかけ、一緒に観察すると、手の形が跡になって残っていた。「手の形になっているね」と伝えると、ゆっくりと自身の手型に沿わせて「一緒だ」と呟いていた。

土粘土が乾き始め、質感が変わっている部分に気付いた。透明のマットからペリペリと外れる感覚が面白いようで、様々な部分を触って、めくれる場所を探して楽しむ。まだ乾ききっていない柔らかい部分に触れると、それまでとは違った感触に一度手を引っ込めたが、またそっと手を伸ばしていた。異なる質感に興味を持ち、触れて確かめる様子が見られた。



土粘土という素材にじっくりと触れ、土粘土が持つ幅広い性質の中で、乾燥すると質感が変化することや、力を加えることで形が変わることを経験する姿があった。子どもたちも「今日も土粘土やりたい」と関心を広げていることから、今後も時間をかけて、土粘土の様々な性質の面白さを経験できるよう時間を設けていく。

土粘土に触れていく中で、子どもたちは土粘土が持つ様々な性質を知っていく姿があった。その中でも、表現として多く見られた「ちぎる」「こねる」に着目し、活動を深めていくこととした。

### 【ちぎる】



長細い形に成形し、子どもたちに提供すると、はじめは「ながいね」「へびみたい」と特徴を言葉にしたり、他のものに見立てたりする姿があった。

その後ちぎりは始める様子があり、そのちぎり方には子どもによって違いが見られた。引っ張ってちぎったり、2つに折ってちぎったり、ねじってちぎったり。

自らの手を道具にして、力を加えることで形が変わっていく楽しさを味わっていた。

### 【こねる】



3 cmほどの厚みで平たい丸型の土粘土を成形し、子どもたちに提供した。すると、それを机上に置き、その上に手のひらを重ね、力を加えてこね始める姿があった。その後もその動きを続け、「こねてるよ」と保育者に伝える。そこから、立ち上がって体重をかけてこねる姿もあり、加える力の強さによって形の変わり方が変わることを知っていく姿があった。

指先を使ってこねる子もあり、子どもによって関わり方の違いが見られた。

「ちぎる」「こねる」いずれも、土粘土に力を加えると形が変わる、という性質を知るきっかけや再確認になり、表現の幅がまた広がったように思う。そして、1つの性質の中でも子どもによって表現方法に違いが見られ、そして、それらの表現方法を使い分ける姿もあった。自らの手を道具にして、形を変えていく楽しさや、同じ形にはならないその瞬間だけの表現を味わえるよう、これからも環境設定していきたい。



あらかじめ成形された様々な形の土粘土に触れた。ブロック型、形になりきっていないもの、ボール型、うずまき型を用意し、活動を始めた。はじめは、形を変えることなく成形された形のまま土粘土を移動させる姿があったが、うずまき型の土粘土に手を伸ばし、持ち上げると形が変わったことから、他の土粘土の形も変えはじめる姿があった。



渦巻を持ち上げると、ちぎれた。

「これ、ストローだよ」

「ジュースを飲んで、ちょっと休憩！」

ちぎって 並べて 動かしていくうちに…

「カメさんになった！」



ちぎって並べていく。

一人でやっている時、いつの間にか友だちも一緒に手伝う姿が。

上に乗ってみると、

「虹だよ！」

「虹の上を歩いているの。」

形を変えていく中で偶然できた形を他のものに見立てたり、自らの手でちぎったり、くっつけたり、並べたり。今まで経験し自らに獲得してきた土粘土の性質を使い楽しむ姿があった。ストローやカメといった身近なものに見立てる子どももいれば、虹の上を歩くというフ物語を紡ぐ子どももいた。この活動を通して、子どもたちは土粘土に親しみを持ち心を通わせながら表現を楽しむとともに、保育者にとっては、子どもの中に内在する表現が言語化、可視化され子どもの表現の持つ可能性を改めて知る機会となった。

## 活動④ 土粘土の可能性を知る（乗る・踏みしめる）

R7年12月

今までの活動では、主に手で土粘土を扱ってきたが、ホールを広く使った活動の際は踏んだり、ジャンプしたりと足を使った動きを見せていたことに着目し、今回は「乗る・踏みしめる」にフォーカスを当てて活動を行った。



「乗る・踏みしめる」という表現の中でも、足の裏全体で踏みしめる子や指先だけに力を入れる子、つま先立ちのようにしてより力を加え、跡をつけようとする子など、子どもによって様々な関わり方があるように感じた。また、遊んでいる中で、柔らかい部分があることに気が始めた。「こっちいっぱい跡が付く」「ここ柔らかい」と状態を言葉で表したり、固い部分と柔らかい部分を何度か往復して感覚を知り、柔らかい端の部分が気に入ったのか、その後は端の部分で足踏みして楽しむ姿があったりと、違いを自らで発見し、更に遊び込む様子が見られた。

「こうしたら形ができたよ」



足の親指で出来たくぼみ



「もっと力を入れてみよう」



「ぐっぐってしたら、かたちのできたの！」嬉しそうに発見を伝えてくる子どもたち。様々なアプローチ方法を試し、考えながら活動に取り組む様子があった。また、今までは手や指先を中心とした活動が多かったこともあってか、足で出来たくぼみを指で触る子どもがいた。どのように触れるのか様子を観察していると、ぐっと押し込む姿があった。足の指で出来た穴に指でさらに穴をあけることを繰り返していく姿を見て、前回との活動の繋がりを感ずることが出来た瞬間となった。

今回は「手や指先で押すこと」に注目して言葉かけを行った。子どものこぶし一つ分程度の大きさの塊を準備し、机上での活動とした。自然と手のひらで押し広げて行く姿が見られたため、「どんどん広がっていくね」と言葉を掛けると、「大きいんだよ」と話していた。その後、ぼろぼろと千切れてきた土粘土を更に指先で押しつぶし薄く広げる姿が見られた。



「小さいのが出てきた」

「指でぎゅってしたらくっついた」

「ここにもつけてみよう」



細かい土粘土を指で押し広げていくと机にくっついて取れにくくなることに気付いた子が、「これ粘土にもくっつけられるんじゃない?」という、「じゃあやってみようよ」と活動が発展していった。大きな土粘土の塊に小さくちぎって指先で押し広げた土粘土をたくさんつけて、創作活動を楽しむ子どもたち。それぞれが作っていたものを交換したり、「これ使っていいよ」と手渡したりと子ども同士の関わりも随所に見られた。

「押したら粘土くっついたね」

「いっぱいくっつけたらロケットになったよ」

「ぼくと、先生と、お友だちが乗るんだ」



押せば応えてくれる、強く押せば大きく変わる、優しく押せばゆるやかに形が残る。「押す」という行為は単なる動作ではなく、素材との対話のきっかけであり、想像力を伴った表現へと広がっていった。

「まるまるさん！」



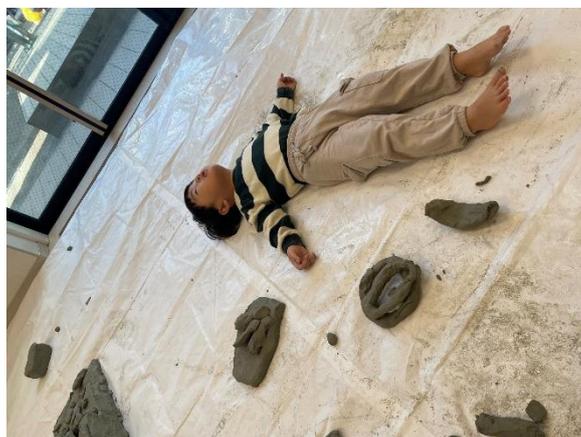
「まるまるさんのおうち作りたい」



「お風呂と寝るところもあるの」



「まるまるさんと一緒に寝るんだよ」



10月より継続して行ってきた土粘土活動。繰り返し触れることで、単なる活動の材料ではなく、思考や感情を映し出す“対話の相手”となっていた。継続的な探求の積み重ねは、子どもたちの内側にあるイメージを豊かにし、やがて創作物に反映されていく。形や構成にも一人ひとりの意図や意味づけが感じられるようになってきた。

手のひらサイズの小さな丸い土粘土から物語が始まる。

「まるまるさん」と親しみを込めて呼び、「おうちを作ろう」「何が必要だろう」と自身の生活経験を土粘土との関わりに重ね合わせながら、お風呂やベッドといった身近な生活空間を作り上げていく。

「まるまるさん、一人で寝てたらさみしい？」

「ぼくも一緒に寝てみようかな」

無機物である土粘土をいのちのある存在としてとらえる子どもならではの世界の広がりや、自身が受取ってきた肯定的な経験を内面化し、土粘土という媒体を通して表現する姿に成長を感じたとともに、土粘土が共に物語を紡ぐパートナーとなっていることに気づき、継続することの意義を改めて実感した。

土粘土で作った形に光を当てることで大きな影が作り出される。同じ作品でも影になることで全く違った形に見えたり、新しい形に気付いたりする。OHP を通して子どもたちの表現を広げ、考えを深め、友だちとの対話を生み出す環境のひとつになってほしいとねらいを設定し、活動に組み込んだ。



「これはパパ、ママだよ」



「小さいのいっぱい」



「壁になにかあるね」

初めて OHP に触れた時、保育室内に常設してあるライトテーブルと似ていたことからスムーズに台の上で遊び始めた子どもたち。土粘土を小さくちぎり、「これはぼくのパパとママ、おばあちゃん」と見立て遊びを始めていた。集中してあそんでいる中、ふと壁を見て投影された影に気付いた。「なにかあるよ」。その際に、たまたま手が土粘土に当たったことで影も動いた。「あれ!？」と手元と影を見比べながら土粘土を動かして遊ぶ姿が見られた。

初めから影との関係性に気付いている子もいた。土粘土を動かすことで影も動くことを楽しむ姿が見られたが、OHP の特性でもある反転の仕組みには中々気付かず、「こっちに行かない」と試行錯誤しながら活動に取り組む姿も見られた。



10 月より継続してきた土粘土活動は、単発の活動ではなく、子どもたちの思考と関係性を育むプロジェクトとして展開してきた。継続的に関わる中で、土粘土は単なる素材から対話する相手へと変化していった。また、月齢の発達とともに、形だけでなく言葉で表現しようとし、OHP を導入したことで、立体表現は光と影という新たな表現へと変換されていった。

本プロジェクトを通して、土粘土は「かたちを作るための物」ではなく、子どもたちの経験、感情、思考を可視化する身近な媒体となった。

使用物

透明マット | マルチケース | ホワイトシート | HDMIケーブル | OHP | 荒木田土 | けと土

テーマ：土粘土

## 全体の振り返り

子どもたちは土粘土と対話し心を通わせる経験をした。はじめは手につく感覚から土粘土に嫌悪感を抱いていた子どもも、活動を重ねていくうちに自ら進んで関わろうとする姿が見られた。土粘土は常に形が変わるものであり、自分で働きかけることで形が変わるものであることを知った子どもたちは、手や足を道具としてその瞬間だけの儂い表現を楽しむ姿があった。保育者がセットアップした土粘土の硬さや大きさ、形によって子どもたちの表現が変わることを実感し、子どもと保育者の協働探究となった。これからも子どもたちの豊かな表現を保障し、土粘土の可能性を共に探究していきたい。

終



**株式会社モニカ**

〒105-0004  
東京都港区新橋1-9-5 KDX新橋駅前ビル 3F  
TEL:03-6661-2466  
FAX:03-6661-2467

**モニカ都立大園**

〒152-0034  
東京都目黒区緑が丘1-2-14  
TEL:03-5726-9145  
FAX:03-5726-9146